

インドにおける『般若心経』注釈文献の研究

—ヴィマラミトラ注 (3) —

堀内 俊郎

はじめに

本稿はインドにおける『般若心経（『心経』）』注釈文献の総合的研究を目的とした一連の研究の端緒である前稿¹の続きであり、ヴィマラミトラ（Vimalamitra）による『心経』の注釈（PHT）に対する校訂テキストと和訳を提示する。校訂テキストの凡例などは基本的に前稿に譲る。そこで述べたように、ヴィマラミトラは（1）導入、（2）時、（3）説法に値遇する聴衆（会衆）、（4）因縁（由来）、（5）質問、（6）その 11 種類の回答²、（7）同意、（8）随喜という八項目でもって、『心経』を注釈する。本稿で扱う範囲はそのうちの（5）質問と（6）の途中までである。『心経』の経文の対応を便宜的に法成訳の漢訳（T no.255, 8.850b27-c5）でもって示せば、以下の通り。

(5) 質問

時具壽舍利子。承佛威力。白聖者觀自在菩薩摩訶薩曰。若善男子。欲修行甚深般若波羅蜜多者。復當云何修學。

(6) その 11 種類の回答

作是語已。觀自在菩薩摩訶薩答具壽舍利子言。

若善男子及善女人。欲修行甚深般若波羅蜜多者。彼應如是觀察。五蘊體性皆空。色即是空。空即是色。色不異空。空不異色。

ヴィマラミトラの『心経』注釈の特色

先行訳の貢献、ならびに本訳との異同は本文を見られたい。不明な点も残ったが、

¹ 堀内 2019ab。

² この 11 が具体的に何を指すのかは本文からは必ずしも明確ではない。本書に対する一種の複注を書いたアティシャとゴクは、それぞれ別様に解釈している。

本稿によって新たに明らかにされたヴィマラミトラの PHT の内容をここで箇条書きにすれば、以下の通り。

・ **(5) 質問**の冒頭部において、舍利弗は観自在に質問をする。そこで、ヴィマラミトラの見ていたテキストには、[いくつかの異本と同様に]「善男子、善女人」ではなく、「善男子」とのみある。その際、ヴィマラミトラは、これを観自在に対する呼びかけ (bod pa) と注釈しており、この箇所は「善男子よ」と訳しうる。

・ ヴィマラミトラは、samanupaśyati という経句は、「事辺際所縁を、止と観によって現前にする」という意味なのだという。この説明の根拠は、以下のような語義解釈にある。

samanupaśyati

(i) sam-=samyak-: 観

(ii) sam-=sama-: 止

(iii) anu-paś: 事辺際所縁を現前にする

・ 一読して明らかのようにヴィマラミトラは「色不異空」・「空不異色」という経文を、経量部を批判するものとみている。その際、本稿では、ヴィマラミトラが示唆する経量部説の範囲について正確に確定しえた。

・ ヴィマラミトラは、生起を世俗的なものとし、同時生起、異時生起の両方を否定する。同じヴィマラミトラによる SPT とカマラシーラの BK, I に、平行議論がある。

テキストと和訳

(PHT, D271a6-273a7, T10-15, P290b4-293a5:)

(5) dris

(atha (khalu) āyusmān śāriputro buddhānubhāvena (āryāvalokiteśvaraṃ bodhisattvaṃ) etad avocat)

de nas zhes 'byung ba ni skabs 'dir de ma thag ^[T11] tu'o//

sangs rgyas kyis (kyis] T; kyi DP) mdzad pa'i mthu ni sangs rgyas kyi mthus te/ bcom ldan 'das kyis mdzad pa'i byin gyi rlabs dang mthus zhes bya ba'i tha tshig ste/don 'di 'phags pa spyān ras gzigs dbang phyug la dri ba'i spobs pa bcom ldan 'das kyis nye bar bsgrubs (bsgrubs] DT; sgrub P) ^[D271b] pa yin no// de lta ma yin na ni (ni] DP; φ T) 'di shā (shā] DP; sha T) ri'i bu'i yul ma yin no zhes bstan pa yin no//

nyon mongs pa spangs pas bsngags par 'os pa'i sgo nas tshe dang ldan pa'i phyir tshe dang ldan pa'o//

shā ri'i (shā ri'i] D; shā ri'i bu P, sha ri T) zhes bya ba ni sha ra dvata (dvata] P; dvada DT) kyi rigs su skyes pa'i bud med do// (do//] DT; de/ P) de'i bu yin pas shā (shā] DP; sha T) ri'i bu'o//

'di skad ces 'byung ba ni 'og nas smos pa'o// smras so zhes 'byung ba ni smras par gyur pa'o (gyur pa'o] PT; 'gyur ba'o D)//

(5) 質問

「次に (atha)」と出ているのは、この場合、「その直後に」[という意味である]³。

仏によってなされた威力[によって]というのが、「仏の威力によって」である。世尊によってなされた加持 (*adhiṣṭhāna) と威力によって、という意味である。すなわち、この意味 (=般若波羅蜜) を観自在に対して質問する弁才 (ひらめき、*pratibhā(na)) が、世尊によって提供されたのである。[すなわち、] “さもなくば⁴これ (=般若波羅蜜の意味) は舍利弗の領域ではない”と説かれたのである。

煩惱を断じていることによって称賛されるに値いするという点で寿 (āyus) を具えているので、「具寿」である⁵。

「シャーリ [-] (śāri/*śārī)」とは、シャラドヴァット (*śaradvat) の家系に生まれた女性である。その(彼女の) 子供 (putra) であるので、シャーリプトラ (シャーリ [-] の子 (舍利弗)) である⁶。

「以下のように (etad)」とは、後に述べられることである。「言った (avocat)」とは、言った、[という意味である]。

³ Lopez, 55: *Then* in this context means immediately.

大八木：「次に」というのは、「この時に」「ただちに」[の意] である。(91)

Lopez 訳が妥当。

⁴ いうまでもなく、仏の威力によるのではなければ、ということ。

⁵ この定義の出典不明。cf. AAA, 11.9.

SPT, D12a4: nyon mongs pa med cing kha na ma tho ba med pa'i sku tshe bstod pa yin pa'i phyir/ tshe dang ldan pa zhes bya'o//

和訳：煩惱がなく非難されない一生 (sku tshe) [-] の称賛であるので、具寿といわれる。

⁶ Lopez, 55: Regarding *Śāriputra*, because he is the son of a woman born into the Śaradvata family, he is Śāriputra.

大八木：「シャーリプトラ」というのは、シャラドヴァットという良家に生まれた女[がいて]、その息子(プトラ)であるから「シャーリプトラ」である。(92)

代案： *Śāri* is a woman born in a family of *Śaradvat*. Since [he is] her son, [he is] *Śāriputra*.

先行訳は bu を含む P の読みを採用しており、文の構造からいっても首肯できない (do//] DT; de/ P の箇所について、P の読みを採用した場合も同様)。T は ri'i ではなく ri とありそちらが好ましいが ri'i でも śāri の訳として問題ない。ただ、BHSD には śārī と長母音の形が採録されているので、元来はそうあり、チベット語の音写の段階で ī が i となった可能性もある。

(yaḥ kaścit *kulaputra (/kulaputro vā kuladuhitā vā) asyāṃ gambhīrāyāṃ prajñāpāramitāyāṃ caryāṃ) cartukāmas (tena) katham śikṣitavyaḥ)

bsngags par bya ba'i don du rigs kyi bu zhes 'byung ba yin te/ dbang bskur ba thob pa nyid kyi sangs rgyas rnams kyi sras khyad par du gyur pa'i phyir 'di ni bod pa yin no//

gang la la zhes 'byung ba ni bye brag ma bstan pa'o//

spyod par zhes 'byung ba ni spyod par byed ^[P291a] pa (pa) DP; par T) dang/ nan tan gyis yang dag par sgrub par ro (par ro) PT; pa'o D)// 'dod pa ni 'di'i 'dun pa yin te/ de la de skad ces bya'o//

yi ge kha cig las spyad pa (pa) DT; par P) byed par 'dod pa des zhes 'byung ste/ byed pa (pa) DP; par T) dang sgrub par zhes bya ba khyad par ba (ba) P; med pa DT) nyid kyi don to//

称賛するために⁷、「善男子（＝観自在）よ⁸」と出ている。灌頂（*abhiṣeka）を得た者であることによって〔観自在は〕勝れた諸仏の子（＝菩薩）なのであるから⁹、これが呼びかけである¹⁰。

⁷ Lopez, 55: *Child of good lineage* indicates praise

大八木：讃える意味で「善男子」という。（92）

par bya ba'i don du はたいてい-artham（～のために）の訳であろう。

代案：In order to praise, it is said: *kulaputra*.

⁸ この訳語については注 10 を参照。

⁹ Lopez, 55: by receiving empowerment, one has the distinction of being a child of the conquerors.

大八木：すなわち、灌頂を得たことで諸仏の子であり、勝れた者となったためであり（92）

難解。特に khyad par du gyur pa'i phyir にはいくつかの可能性があろう。ここでは、AKVy(t), D ngu 196a2 での同じ語が AKVy, 565: -viśeṣād の訳であることにかんがみて、*buddhasutaviśeṣāt/ -viśeṣabhūtatvāt を想定し、本文のように訳した。なお、gyur pa には、「～となった」、「～である」という両方の可能性があるが、ここでは後者を採用した。

代案：because he [Avalokiteśvara] is a distinguished son of buddhas (=a bodhisattva) inasmuch as he is the one who has obtained consecration (*abhiṣeka),

¹⁰ 以下では PHT にある「善男子」という語について検討する。

梵本では前後には yaḥ kaścit kulaputro vā kuladuhitā vā とある（渡辺 2009: 25）。その際、渡辺 2009: 25, fn.4 に、「ye kecit kulaputrā vā kuladuhitā vā とする異読あり。慧運本系統は kuladuhitā vā を欠く」という指摘がある（ただ、最後部は正確には「vā kuladuhitā vā を欠く」であろう（Müller 1881, 52））。チベット語訳諸本には'am rigs kyi bu mo を挿入する異読もあるようであるが、Silk 校訂本では、AB 両系統ともに rigs kyi bu gang la la の読みが採用されている（cf. ibid., 34-35）。そこで、まず、PHT 所引の『心経』には vā kuladuhitā vā を欠いていたと指摘しうる（なお、一般的に、注釈書において、ある語句が注釈されていないことは、所釈の経文にその語がないことを意味しないのは無論である。しかし、本 PHT では、後出の「(6) 回答」の冒頭部で、「善男子あるいは善女人」という経文が引用されており、かつ、注釈されている。それについて、本書のほかの箇所での注釈方法を鑑みれば、それより前の箇所である本箇所において「善男子あるいは善女人」という同じ語が存在していたならば、ここで注釈をし、後出のその箇所では注釈しない、あるいは、以前に注釈したという趣旨のことを書いているはずである（この想定根拠は、「甚深」、ならびに「般若波羅蜜」の意味に関する説明である。順に、本論のシノプシスで (4) 因縁、(6) 回答の箇所を参照）。しかし、それより前の箇所である本箇所では「善男子」のみ

「誰であれ」とは、区別を説かないのである。

「行ずることを (cartu-)」とは行ずることと、熱心に成就することである。「欲する (-kāma)」とは、これに対する意欲 (*chanda) である¹¹。すなわち、彼に対してそのように言われる (彼がそのように (= 「[行ずることを] 欲する者 (*cartukāmas)」 と) 呼ばれる) ¹²。

ある異本には、「行をなすことを欲する者、彼は (*caryāṃ kartukāmas tena)」と出ている¹³。すなわち、なすことと成就することというのが区別されるという意味で

が言及されている。ゆえに、本箇所には「善男子」とのみあったと推測される)。

次に、この「善男子」という語の理解について。yah kaścit kulaputro とあった場合、「誰であれ、善男子は、」と、同格関係となる (Silk 1994: 174: whichever gentle son who. なお、yah kaścit kulaputro vā kuladuhitā vā や、それらが複数形となっても同様)。しかし、ここで、善男子の説明に用いられている bod pa は呼びかけを意味する。とすれば、この rigs kyi bu の格は呼格 (Voc.) で、PHT の見ていた『心経』には*yah kaścit kulaputra とあった、あるいは同書はそのように解釈しているものと推測され、PHT に基づく訳としては「善男子よ、誰であれ」と訳すべきであろう (むろん、これは、『心経』自体もそう読むべきであるということ必ずしも意味しないが)。なお、kulaputra が呼格で用いられている例としては、本『心経』末尾がまず挙げられる。また、たとえば、『八千頌般若』15 章で、世尊がスプーティに kulaputra と呼び掛けている (AAA, 593.13: ehi tvam kulaputra)。そして、これは少なくともチベット語による限り単数形であり、かつ、「灌頂 (*abhiṣeka) を得た者」と限定されているのであって、菩薩全般を指すのではない。その灌頂はいうまでもなく第十地で得られるものである (『十地経』第十法雲地の記述を参照)。以上のことから、「善男子」とは具体的には観自在に対する舍利弗からの呼びかけとみられる。

これは、『心経』のいくつかの異本やヴァイローチャナ (『集成』132)、ジュニャーニャミトラ (『集成』156) 注では「善男子」とのみあり「善女人」が言及されていないことへの一つの有効な解釈といえる。この問題について、ロントウン・シェチャクンリクは、その『心経』への注釈書の中で、インド本には「善女人」への言及があるから、『心経』本文にそれがないと述べることは誤りであるとし、テキストとしては「善男子、善女人」の両方を挙げている (『集成』334 の現銀谷史明氏訳を参照。同氏が訳の底本とした TBRC Resource ID W8471 では、157.5-6)。これは一つの解釈であろう。もう一つの解釈の可能性が、ヴィマラミトラのように、「善男子」を、観自在に対する呼びかけととらえるというものであろう。

¹¹ Lopez, 55: *Wish is to aspire to this.*

大八木: 「望む者」はこの〔行を〕望む者であり (92)

Lopez 訳が妥当。cf. AKBh: chandaḥ kartukāmatā, 'dun pa ni byed 'dod pa'o (『五位七十五法』57)

¹² Lopez, 55: [He] *said that.*

大八木: 彼に対して「そのように」と言われたのである。(92)

代案: He is called so (i.e., is called *cartukāmaḥ*).

¹³ 大八木氏は des, tena に着目し、tena の有無が異読のポイントであると理解しているようである。しかし、ヴィマラミトラは他の個所では異読を提示する場合、その異読をとった場合に『心経』当該箇所がいかに別様に解釈されるかということも示している。ここでも直後にそれについての説明がある。筆者はそれを十分に解読できないのだが、少なくともそれは tena の有無には関係しないことは確かである。ゆえにここで tena の有無が問題になっているのではなからう。他方、注意深く読めばここには他の異読が看取される。すなわち、前の箇所からはヴィマラミトラの見ていた『心経』のテキストとして「spyod par」「'dod pa」が得られるが、この異読では、それが byed par 'dod pa と、下線部が異なるのである。そして、前者は経文に支持されるように cartukāmas であるが、後者には明らかに *kartukāmas が想定される。かくして、ヴィマラミトラは主にこの異読をここで指摘しているものとみられる。とすれば、I 案として、

(I 案) PHT 所積の経文: *cartukāmas/-kāmena

ある¹⁴。

(I) bsam pa dang/ (II) sbyor ba dang/ (III) mngon du bya ba dang/ (IV) sgrub pa dang/
(V) rtogs pa'i rnam pa gang gis ji ltar bslab par bya/ goms par bya/

(I) 志向、(II) 実践、(III) 現前、(IV) 成就、(V) 理解の〔うちの〕どんな行相によって、「どのように学ぶべきか」、すなわち、修習すべきか¹⁵。

(6) lan (lan btab pa rnam pa bcu gcig)

(evam ukta ... kulaputro vā kuladuhitā vā ... tenaivaṃ vyavalokitavyam)

ヴィマラミトラの報告する異読：*caryāṃ kartukāmas tena
の可能性がある。

他方、それ以外に異読がある可能性もある。すなわち、ヴィマラミトラの注釈から回収される『心経』の本箇所は、rigs kyi bu gang la la ... spyod par 'dod pa ...であるので、*yaḥ kaścit kulaputra ... cartukāmas ということになる。本文に掲載した梵本にはそれ以外の個所をカッコで括ったゆえんである。しかし、だからといってカッコ内が存在していなかったと見ることは適切ではあるまい。少なくとも、目的語である asyāṃ gambhīrāyāṃ prajñāpāramitāyāṃ caryāṃ を欠くことは文章表現からいって不合理である。すでに注釈しているからなどの理由でたんに注釈しなかっただけという可能性が高いのである(asyāṃ を除く語は以前に注釈されていることに注意)。とすれば、ヴィマラミトラの見ていた『心経』には caryāṃ cartukāmas tena とあり、それに対して *caryāṃ kartukāmas tena という異読があったという報告ともみられる。かくして、II 案として、

(II 案) PHT 所釈の経文：*caryāṃ cartukāmas tena

ヴィマラミトラの報告する異読：*caryāṃ kartukāmas tena

という可能性もあろう。チベット語訳『心経』では AB 両系統ともに、des が存する (Silk 1994, 114, 115) ことも、この想定を支持する。ただ、tena は後出の 6.回答で注釈されているが。

Lopez, 55: Some editions say “wish to do the practice.”

大八木：『般若心経』の〕ある写本には「行を行ずることを望む者、彼は」という。(92)

代案：Some texts say “[somebody who] wish to do (*kartukāmas) the practice, he”

¹⁴ byed pa dang sgrub par zhes bya ba khyad par ba (ba) P; med pa P) nyid kyi don to//:

この異読をとった場合、『心経』がどのように別様に解釈されるかは、前注に述べたように明確ではない。P と D にも異読がある。いずれもチベット語としてスムーズではない。D をとった場合、「区別がないことの意味である」とでもなろう (区別がないという意味であるという場合、チベット語としては、*khyad par med do zhes bya ba'i don to/tha tshig go あたりが想定される)。P をとった場合、直訳すれば「区別こそその意味である」とでもなろうが、ここでは上記のように読んでおいた。

まず、「なすことと成就すること」、というのは、前出の「行ずることと、熱心に成就すること」と同じであろう。ヴィマラミトラの見ていた経文によれば、なすことと成就することが区別されないが、異読では区別される、という意味であろうか。あるいは D の読みが正しく、逆の意味か。あるいは khyad par med pa は khyad par byed pa の誤りとみるべきか。

¹⁵ アティシャによれば、以上の五つは五道に対応する(『集成』220)。図示すれば以下の通り。

五道	別名	認識対象	認識方法	地	経句
資糧道	bsam pa	有分別影像所縁	観		vyavalokitavyam
加行道	sbyor ba	無分別影像所縁	止		(vyavalokitavyam)
見道	mngon du bya ba	事辺際所縁	止と観	初地	samanupaśyati
修道	sgrub pa	(上記の三つ)	(//)	二～九地	
無学道	rtog pa	所作成弁所縁	(//*)	十・十一地	

*: 『解深密経』(SNS, VIII, §2) によれば所作成弁所縁も止観の対象であるのでカッコで補った。なお、四種所縁の梵本は AS (一部), ASBh, BK から得られる。

de skad ces zhes (ces zhes] PT; ces D) 'byung ba ni rnam pa snga ma la bya'o//
 smras pa dang zhes 'byung ba ni brjod ba dang zhes bya'o (bya'o] D; bya ba'o PT)//
 rigs kyi bu'am rigs kyi bu mo zhes 'byung ba ni 'di 'phags pa rnam kyis (kyis] D; kyi
 PT) brjod par 'os pa yin no// 'am zhes 'byung ba'i sgra ni phan tshun ltos (ltos] DT; bltos
 P) pa ste/ gnyi ga yang yin par lta bar (par lta bar] DT; par P) bya'o//
 des zhes 'byung ba ni (ba ni] PT; ba D) spyad pa spyod par 'dod pas so//
 'di ltar zhes 'byung ba ni 'og nas 'byung ba'i tshul gyis so//

(6) 回答

「以上のように」とは、以前に〔説かれた〕あり方を指す。

「言われる」とは、述べられると、ということである。

「善男子あるいは善女人」とは、これが聖者たちによって述べられるに相応しい〔語〕である。「あるいは (vā)」という語は相互依存〔の語〕であって、両方とも〔そう〕であると見られるべきである¹⁶。

「彼は (tena)」とは、行を行わずのことを欲する者は (*caryām cartukāmena)、〔と
 という意味である〕。

「以下のように (evam)」とは、後に出ているやり方 (*naya) で。

(vyavalokitavyam)

rnam par blta bar bya ste ^[T12] zhes 'byung ba ni rnam pa sna tshogs su so sor brtag
 (brtag] DT; brtags P) par bya'o// 'dis ni (1) rnam par rtog pa dang bcas pa'i gzugs brnyan
 lhag mthong gi (gi] T; gis DP) dmigs pa (pa] DT; par P) brjod do// (2) sems pa'i (pa'i] D;
 de'i PT) bar ma chad pa (chad pa] DT; chad P) nyid du (nyid du] PT; nyid D) gcig tu rnam
 par mi rtog pa'i gzugs brnyan zhi gnas kyi dmigs pa yang blta bar bya'o//

「照見すべきである」とは、種々な (*vividha) 様相 (*prakāra) として¹⁷個別観
 察すべきである〔という意味である〕。これ(この句)によって、観(観察、*vipaśyanā)
 の認識対象である(1) 有分別影像 (*savikalpapratibimba(ka)) を述べる。(2) 〔他の〕
 思 (*cetanā) 〔による〕分断・断絶がないものとして、〔有分別影像と〕共なるもの

¹⁶ Lopez, 55: The term *or* means either or both.

大八木：「あるいは」という語は、それぞれを見ることであり、両方ともいると見るべきである。
 (92)

難解。「善男子あるいは (vā) 善女人 (vā)」という経句は、もしくは、ではなく、「両方」
 を意味するという意味か。あるいは、二つある vā の「両方」ともが相互依存 (itaretarāpekṣā,
 parasparāpekṣā(?)) の語であるという意味か。yang があることからすれば後者のようであるが意
 味上は前者を取りたいところ。

¹⁷ 既出の「般若」に対する語義解釈を参照。

として¹⁸、無分別影像 (*nirvikalpapatibimba(ka)) – 止 (止念、*samatha) の認識対象 – も、[この句によって] 見られるべきである¹⁹。

(samanupaśyati sma)

yang dag par rjes su blta'o (blta'o] DP; lta'o T) zhes 'byung ba ni (i) phyin ci ma log pa'i phyir (phyir] DP; φ T) yang dag par ram/ (ii) mtshan nyid med pa nyid kyis dbyer med pa'i phyir mnyam par ram/ (iii) chos thams cad kyi phyir kun tu rnam par lta ba dang rjes su mthun par (mthun par] D; mthun par par P, 'thun par T) lta ba ni yang dag par rjes su lta ba ste/ (3) (iii') dngos po'i [D^{272a}] mtha'i dmigs pa (ii') zhi gnas dang (i') lhag mthong gis mngon sum (mngon sum] DT; mngon P) du byed ces bya ba'i tha tshig go// 'dis ni dngos po'i mtha'i dmigs pa mthong ba'i lam gyis bsdu pa (pa] PT; pa'i D) sa dang po bstan to//

(i) 不転倒であるから正しく (*samyak)、あるいは、(ii) 特徴が存在しないことによって区別がないから平等に (*sama)、あるいは、(iii) 一切法のために (一切法を²⁰) 遍く照見する (*vyava/lok) ことに沿って (*anukūla/anuloma) 見ること [という三つ] が、sam-anu-paśyati である²¹。すなわち、(iii') 事辺際所縁

¹⁸ この一段の趣意は、vyavalokitavyam という経句によって、有分別影像が直接的に説かれており、間接的には無分別影像も説かれているということである。そのなか、この箇所は無分別影像に対する修飾句であろうが、難解。諸本の異読もこの難解さを物語る。異読の全体像は以下の通り。

sems pa'i bar ma chad pa nyid gcig tu D, sems de'i bar ma chad nyid du gcig tu P, sems de'i bar ma chad pa nyid du gcig tu T

『心経』のアティシャ注 (『集成』221、望月海慧訳) では以下の下線が関連しよう。D ma 315b3-4: de ltar [1] tshogs lam skyes pa la shes pa gzhan gyis bar ma chod par drod la sogs pa nges 'byed skye ba yin pas mdo'i tshig 'dis ni (2) rnam par mi rtog pa'i gzugs brnyan zhi gnas kyi dmigs pa yang 'di nyid kyis bshad pa yin no//

和訳：そのように資糧道が生じたときに、他の智によって断絶・中断されずに暖などという順決択 [分] が生ずるので、この経句によって、止の認識対象 (所縁) である (2) 無分別影像も、この同じもの (経句) によって説かれたのである。

これにより、有分別影像の直後に無分別影像が得られ、それは他の思 (cetanā) によって分断されないという点で有分別影像と共なるもの (gcig tu) であるという説明と見た。gcig tu は無分別にかかる (ひとえに (gcig tu) 無分別な) という可能性は少ない。無分別影像は一つの語であるから。

¹⁹ Lopez, 55: One should also view the observation by quiescence, which is a nonconceptual reflection with an uninterrupted and one-pointed mind.

大八木：その心の中に不断で一つのものである無分別の影像 [すなわち] シヤマタ (止) による所縁を、また見るべきである。(93)

代案：one should also see “the image without conceptualization (*nirvikalpapatibimbakam)”, which is an object of calmness, as something that is together with [the image with conceptualization, *savikalpapatibimbakam], [since it has] no interruption by [other] thought (*cetanā).

²⁰ テキストには chos thams cad kyi phyir とあり異読はないが読みづらい。「一切法を」の意味でとりたいところ。

²¹ Lopez, 55: Regarding *should view correctly*, it is correct because it is not mistaken, or it is balanced because it is indivisible due to being without characteristic, or because it views in accordance with

(*vastuparyantatāmbana) を、(ii') 止と (i') 観によって現前²²にするという意味である。これ (=samanupaśyati という句) によって、事辺際所縁、すなわち、見道に含まれる初地が説かれた²³。

de nas gong du (3) dngos po'i mtha' dang/ sngar bstan pa rnam pa ^[P291b] gnyis te/ sa gnyis pa la sogs pa la ni dmigs pa gsum po de dag yin par blta (blta] DT; lta P) bar bya'o//
sa mthar phyin pa bcu pa dang/ de bzhin gshegs pa'i sa la ni chos kyi sku thob pa'i phyir
(4) dgos pa yongs su grub pa de nyid dmigs pa yin no//

それ(初地)以降では、事辺際〔所縁〕と、以前に説いた二種類²⁴がある。すなわち、第二地などにおいては、それらの三つが認識対象であると見られるべきである。

第十究竟地(第十地)と如来地(第十一地)では、法身を得るので、(4) 所作成弁 (*kāryapariniṣpatti)、それこそが認識対象である。

de skad du 'phags pa dgongs pa nges par 'grel pa las/

de sngar zhi gnas dang lhag mthong thob pa'i phyir (1) rnam par rtog pa dang bcas pa dang/ (2) rnam par mi rtog pa'i gzugs brnyan gyi dmigs pa thob pa yin no//
da ltar ni mthong ba'i lam thob pa'i phyir (3) dngos po'i mtha'i dmigs pa thob (thob]

viewing all phenomena in all ways.

大八木：「見抜いた」というのは、誤りが無いから「正しく」であり、あるいは特徴がないことで無差別だから「平等に」であり、あるいはすべての存在のためにすべてを照見に随って見ることが、「見抜く」〔ということ〕である。(93)

梵本に基づく語義解釈であるので、梵本との対応を示すことが必要。

代案： *Sam-anu-paśyati* is to see (i) correctly (*samyak*) since [they=all dharmas are] erroneous, (ii) equally (*sama*) since [they are] undistinguishable inasmuch as they are signless, and (iii) in accordance with (*anu*) the complete and analytical viewing of (lit. for the sake of) all dharmas.

注 23 を参照。

²² mngon sum du か mngon du か悩ましいが、いずれにせよ梵本は *sākṣī*(√kr) もしくは *abhimukhī*(√kr) が想定される。

²³ ヴィマラミトラは、*samanupaśyati* という経句は、「事辺際所縁を、止と観によって現前にする」という意味なのだという。どのようにしてその解釈が導かれるかという点は翻訳を提示しただけの先行訳によっては解明されていなかったが、以下の通り。

samanupaśyati

(i) sam-=samyak-: 観

(ii) sam-=sama-: 止

(iii) anu-paś: 事辺際所縁を現前にする

²⁴ 「二つ」とは有分別影像と無分別影像を指す。その点で Lopez 氏の理解は不適切で、大八木氏(『集成』116.fn.46)の理解が適切。

Lopez, 55: Then, above that, there are two aspects, the limit of things and what was set forth before

代案： Above that, there are “(3) the limit of entity” and the two aspects which were set forth before (namely, (1) image with conceptualization and (2) image without conceptualization)

DT; 'thob P) pa yin no//

de sa (de sa] em., des DPT) gong nas gong du bsgom pa'i lam dang rab tu ldan pa dmigs pa gsum po de dag nyid yid la byed na mtshan ma dang gnas ngan len thams cad bcom pa'i phyir mthar gyis sa gong nas (nas] DP; nas sa T) gong du gser lta bur sems rnam par sbyong zhing bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub mngon par rdzogs par 'tshang rgya ba'i bar du (4) dgos pa yongs su grub pa'i dmigs pa yang 'thob po

(SNS, VIII, §36.3: des sngar zhi gnas dang lhag mthong thob pas ni (1) rnam par rtog pa dang bcas pa'i gzugs brnyan dang/ (2) rnam par mi rtog pa'i gzugs brnyan gyi dmigs pa rnam pa gnyis thob pa yin no//

de ltar na mthong ba'i lam thob pas (3) dngos po'i mtha'i dmigs pa thob pa yin te/

de sa gong ma gong ma rnams su bsgom pa'i lam la zhugs shing/ dmigs pa rnam pa gsum po de dag nyid yid la byed pa na/ [...] mtshan ma dang gnas ngan len thams cad legs par bcom pas rim gyis *sa gong ma gong ma rnams su gser lta bur sems rnam par spyod la/ bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub kyi bar du mngon par rdzogs par 'tshang rgya zhing*²⁵ (4) dgos pa yongs su grub pa'i dmigs pa'ang 'thob ste/

『解深密經』(T no.676, 16.702b6-16) : 彼於先時由得奢摩他毘鉢舍那故。已得二種所緣。謂有分別影像所緣及無分別影像所緣。彼於今時得見道故。更證得事邊際所緣。

復於後後一切地中進修修道。即於如是三種所緣作意思惟。[...] 漸次於彼後後地中。如煉金法陶煉其心。乃至證得阿耨多羅三藐三菩提。又得所作成滿所緣。²⁶⁾

zhes gsungs te/ rgyas par ni de nyid las rig par bya'i/ (bya'i] em., bya'i// P; bya'o// DT) 'dir ni dpe nye bar sbyar ba tsam ^[T13] zhig smos pa yin no//

『解深密經』に、

「彼は以前に止と観を得たので、(1) 有分別影像と (2) 無分別影像という所縁 (認識対象) を得る。

²⁵ *~*は BK, II (梵本の存しない篇) にも引用される。資料情報は一郷 2011: 95。また、BK, III, 30.8-12 には、*tatas taduttarā bhūmīḥ pariśodhayan kramena kanakavad ... kāryapariniṣpattim cālabanam pratilabhate/*と、類似表現がある。一郷 2011: 127。

²⁶ 大八木氏が漢訳を挙げているように、『解深密經』(SNS)「分別瑜伽品」からの引用。ただし、途中を省いた引用となっている。「...」でもってそれを示した。

〔彼は〕今や見道を得たので、(3) 事辺際所縁を得た。彼は、地を上を上にと (=二地以降)、修道に入り²⁷、それら同じ三つ (~ (1) ~ (3)) の認識対象に傾注 (作意) すれば、一切の相 (*nimitta) と麤重 (*dauṣṭhulya²⁸) を破壊するので、順次に、地を上を上にと、黄金 [を浄める] ように、心を浄め、無上正等覚を現等覚するに至るまで [になり]、(4) 所作成弁所縁も得る。

と説かれている。詳細はその同じ [経典] にて知られるべきである。ここでは喩例の提示 [の部分] のみを述べた²⁹。

(pañca skandhās tāṃś ca svabhāvaśūnyān)

[Q] ji ltar na rang gi dngos po stong pa la sogs pa'i rnam pa'i sgo nas phung po la sogs pa la rnam par lta ba ni (ni] DP; na T) (i') phyin ci ma log pa'i phyir yang dag pa dang/ (ii') mtshan nyid med pa nyid kyis mtshan nyid gcig pa'i phyir (phyir] DP; phyir dang T) mnyam pa dang/ (iii') chos thams cad yang dag par rjes su mthong ba yin zhe na/ (五蘊体性皆空。)

【問い】「自性に関して空である (*svabhāvaśūnyā) 」などという形相の観点から [五] 蘊などを観察することが、どうして、[先に言われたように] (i) 顛倒ではないので「正しく (*samyak)」、(ii) 特徴が存在しないことによって [同] 一の特徴を持つものであるので「平等に (*sama)」、(iii) 一切法を正しく [ありのままに] 従って (rjes su, *anu) 見ることになるのか³⁰。

²⁷ Lopez, 56: thoroughly endowed thereby with the path of meditation on higher and higher [stages]
大八木：彼がますます修道に専念して (93)

PHT 諸本では冒頭部には des とあるが、Lopez 氏が適切に補っているように、「地」が要求されるところ。現に、他方、SNS では de sa とあり上掲の玄奘訳の漢訳にも「地」とある。他方、『瑜伽論』「撰決択分」所引の『解深密経』では、des sa とある (D zi 78a4。漢訳も同様。T no.1579, 30.728a15)。PHT の諸本の読みはツェックの見落とし (本引用の冒頭部には des とあることも関連しよう)、あるいは des sa と sa が二つ続くことによる sa の脱漏で説明できる単純な誤りとみられるので、テキストを訂正して読んだ

代案：he has entered the path of cultivation in higher and higher stages

²⁸ 大八木氏のいうように、相縛と麤重縛のこと。梵本は BK, III, 1.8-9 から得られる。関連文献は一郷 2011: 101. nimittabandhanāj jantur atho dauṣṭhulabandhanāt*/

*: sic.だが、dauṣṭhulya-が一般的であろう。

²⁹ Lopez, 56: here just an example has been provided.

大八木：ここではただ例えを用いて言ったのである。(93)

実際の引用経文を見れば、例えが述べられたのでもなく、例えを用いて言ったのでもない。黄金を浄めるように、という喩例の提示の部分のみ (実際はその前後も含めてであるが) を引用した、ということであろう。梵本としては *drṣṭāntopanyāsa あたりが想定されるか。

³⁰ Lopez, 56: In viewing the aggregates and so forth from the point of view of their being empty of the thing itself, and so on, it is correct because it is not mistaken, it is equal in that it has a single defining characteristic because it lacks a defining characteristic, and all phenomena are seen correctly. Why?

大八木：「自身は空である」等の文章によって蘊などを照見することは、誤りではないので清浄

(自説の提示 1³¹)

(rūpaṃ śūnyatā)

[A] gzugs stong pa'o zhes bka' stsal te/ skabs yin pa'i phyir rang gi ngo bo nyid kyis
zhes 'byung ba dang sbyar ro//

'di ltar gzugs la sogs par (par] DP; pa T) snang ba la (1) dngos po yin pa dang/ (2) btags
pa yin par smra (smra] DT; snang P) ba rnam rnam pa de gnyis su rtog (rtog] PT; rtogs D)
par byed do//

(色即是空)

【答え】「色は空である」と説かれている。主題であるから、「自性に関して (svabhāva-)」と [いう前に出ていた語がこれに] 係る³²。

色などという顕現 (*rūpādy-ābhāsa) について、(1) 事物 (実在、*vastu (= dravya))
〔と主張する者たち〕と、(2) 仮設 (言語設定されただけのもの、*prajñapti) であ
ると主張する者たちという、その二種類として想定される。

(1') de la gzugs la sogs pa snang ba dngos po yin par smra ba ni **bye** ^[P292a] **brag tu smra**
ba dang/ dpyod (dpyod] DT; spyod P) pa pa la sogs pa'o//

(2') don snang ba btags pa yin par smra ba ni **mdo sde pa ste/ de dag 'di skad du don**
(don] em.; don ni DPT) sngon po la sogs pa phyi rol ^[D272b] na yod pa nyid (nyid] DT; φ P)
yin la/ myong ba ni rnam par shes pa 'di la rnam pa gang bsgos (bsgos] PT; bsgom D) pa
yin no//

そのなか、(1') 色などという顕現が事物 (実在*vastu) であると述べる者は、毘
婆沙師 (Vaibhāṣika) とミーマーンサー派 (Mīmāṃsaka) などである。

である。無相によって一相であるので平等である。すなわち、すべての法をよく観察したもの
である。(93)

代案：[Objection] in what manner the viewing of aggregations and so on (i.e., *skandha, dhātu, āyatana*)
from the viewpoint of the aspect (**prakāra*) of “empty of own nature” and so on (i.e., (1)~(8)) is, [as you
said before,] (i') correct since it is errorless, (ii') equal since it has single characteristics inasmuch as it is
without characteristics, and (iii') viewing [of] all dharmas correctly and in accordance with (*anu-*) [things
as it is].

ここでは rnam par lta ba とあり *vyavalok が想定されるが、記述内容からみて yang dag par rjes su
lta ba, *samanupāś に対する先の解釈が適用されていることが明らかである。Lopez 訳は大きく外
してはいないが、その箇所との関連が不明瞭。大八木訳は理解しがたい。

³¹ 以下、ゴクの科文に従ってひとまず段落分けしてみた (『集成』313ff.)。

³² Lopez, 56: because of the context, [empty] of intrinsic entity should be affixed.

大八木：[その] 説明をするために「自性をもって」という〔語〕を付け加えたのである。(93)
skabs は「説明」を意味しない。Lopez 訳が適訳。ヴィマラミトラは、「色は空性」であるとい
う経文を、「色は自性に関して空性 (空なるもの) である」と読むように指示しているのである。

(2') 対象物の顕現 (**artha-ābhāsa*) が仮設 (**prajñāpti*) であると述べるのは、経量部である。彼ら(経量部)は、“青などという対象物 (**nīādy-artha*) は外界に存在するに他ならないが、[その] 経験 (**anubhava*, 感受) は、この識において薫習 (*vāsita*) された形相 (**ākāra*) である”と述べる³³。

(1'') *sngon po la sogs pa la rang gi ngo bor rnam par rtog pa mang po rdul phra rab dang/ des brtsams pa cha shas can dang/ rnam par shes pa dang/ gtso bo dang/ sgra'i tshangs pa la sogs pa yongs su gyur pa tha dad par rtog pa'i dra ba ngan pa de dag thams cad ni rang gi ngo bo bkag pa nyid kyis bcom par 'gyur bas de nyid brjod par bya'o//*

gang de dag (dag] DT; dag la P) ba lang rdzi dang bud med yan chad la grags pa dngos su gsal bar snang ba'i gzugs de nyid dri za'i grong khyer ltar ngo bo nyid kyis stong pa yin te/ gzugs snang ba 'di la rang gi ngo bo 'ga' yang med do// de bas na rang gi ngo bo stong pa nyid 'di la gzugs so zhes bya ste/ 'dis ni bye brag tu smra ba dang/ dpyod (dpyod] DT; spyod P) pa pa la sogs pa 'dod pa'i gzugs rang gi ngo bo stong pa nyid du bstan pa yin no//

青などに対して多くの自性を構想分別すること (**vikalpa*) –すなわち、極微 (**anu*)、それ(極微)によって作られたところの部分を持つもの (**avayavin*)、識、根本原質 (**pradhāna*)、語というブラフマン(聖典、**śabdabrahman*) など、さまざまな変化(様態)として理解・分別・構想される悪い網—それらの一切は、自性を否定することのみによって破壊されるから、まさにそれ(=色即是空)が述べられるべきである³⁴。彼ら牛飼いの女性に至るまでに³⁵よく知られている、実在として

³³ Lopez, 56: who say that in fact, [things] such as blue exist externally [272b] but that with regard to experience, the aspect that is contemplated is in this consciousness.

大八木：彼らは、「事物は青等の外界に存在するものである」[ということについて]、知覚はこの識において薫習されたものである[とする]。(94)

大八木訳は不正確。他方 Lopez 氏は *don* を *don du* のように読んで「実際に」と訳したのであるが、不適切。

筆者としては、ここで、テキストを、*don ni sngon po la sogs pa* から、*don sngon po la sogs pa* に修正した。すなわち、*ni* を削除し、**nīādyartha* というコンパウンドと見た。原文ママで直訳すれば、「対象物は青などであり」となるが、**nīādyartha* はこのような議論の中で出る一種のストックフレーズであるので、修正を施した。

Cf. Lyne (2016): 58. fn.72: ... *nīādyartha*[h]. “Blue” [or “yellow” (*pīta*), etc.] is the standard example of the external form grasped by the sense-organs ...

代案：They say that “an object such as [a] blue (**nīādyartha*) exists precisely (**eva*) externally. Experience (**anubhava*), on the other hand, is a form/appearance (**ākāra*), which is perfumed/impregnated (**vāsita*) in this consciousness (**vijñāna*)”.

³⁴ Lopez, 56: Therefore, this is said:

大八木：その通りに言われるべきである。(94)

代案：Therefore, that (i.e., *rūpaṃ śūnyatā*) should be spoken.

明らかに顕現しているその「色」こそは、ガンダルヴァの城のように、「自性を欠いている（自性空）。つまり、この色という顕現（*rūpābhāsa, Kdh.）においてははいかなる自性も存在しない。それゆえ、この、「自性」〔に関して〕「空であること」を、「色」と言う³⁶。すなわち、これ（色即是空・空即是色）によって、毘婆沙師とミーマーンサー派などが主張する色が自性に関して空である（自性を欠いている）ことを説いたのである。

(rūpān na prthak śūnyatā śūnyatāyā na prthag rūpam)

(2'') mdo sde pa rnam sngang ba rnam par shes pa'i ngo bo yin pa'i phyir sngon po la sogs par sngang ba ni don gyi rang gi ngo bos stong pa yin no// phyi rol gyi don ni yod pa [T14] kho na yin pas stong pa nyid las gzugs gzhan yin no snyam du sems na/ de dag kyang gzugs las stong pa nyid gzhan ma yin no// stong pa nyid las kyang (kyang] DP; φ T) gzugs gzhan ma yin no zhes 'byung ba 'dis 'gog par byed do//

(色不異空・空不異色)

(2'') 経量部の者たちが、“顕現（*ābhāsa）は識を本性/本体とする（*vijñāna-svabhāva/rūpa(Bv.)) ので、青などの顕現（Tp.）は、対象物の自性に関しては（*arthasvabhāvena）空である。しかし（*tu）、外界の対象物（*bāhyārtha）は存在するに他ならないので、空性と色は別である（空性とは別に色がある）”と考えるならば³⁷、彼らをもまた、「色と空性とは別ではない。空性とも色は別ではない

de nyid は色即是空を指す。Lopez 氏は「:」とし、あとに続けているようであるので大過はないが不正確。

³⁵ ba lang rdzi dang bud med:

Prasannapadā, Poussin ed., 418.12, 419.3: ā gopālāṅganādiko (hi) janah, D 'a 137a1-2, 3: skye bo ba glang rdzi dang bud med yan chad kyis

³⁶ これも「色即是空」を指すとみる可能性もあろうが、ここではこれが「空即是色」に当たると見た。この前後については Horiuchi 2018 も参照。

³⁷ Lopez, 57: The Sautrāntikas [assert] that the appearance is of the entity of consciousness. Therefore, the appearance of blue and so forth is empty of the own entity of an [external] object. If they think that form is other than emptiness because [form is empty] only of being an external object, they are refuted by ...

大八木：「経量部が「〔色は〕識の自性であるので、青等を見ることは事物の自性として空である。外境はただ存在するものであるので空性と色は異なるものである」と考えるならば（94）

大八木訳にはさまざまな問題があるが、まず、最初の句は Tp.ではなく Bv.である。また、〔色は〕と補っているが、「色が識の自性である（Tp.）」にせよ「色が識を自性とする（Bv.）」にせよ、〔色は〕と補ってしまうと、その説はもはや経量部説ではなく唯識説となってしまう。この補いは、直後に明らかに「外界の対象物（bāhyārtha）は存在するに他ならないので」と説かれていることと矛盾する。しかし、大八木氏は経量部説の引用範囲（「」内）の理解に関しては妥当。他方、Lopez 氏は一文目の理解は基本的に妥当。しかし、三行目で、If they think と訳しているのは snyam du sems na の範囲をここからと見たのであろうが（代わりに一行目に assert を補っている）、それは首肯できない。

代案：If the Sautrāntikas think that (snyam du sems na) “Appearance of blue and so on* is empty of the

(色不異空・空不異色)」と出ているこれによって否定する。

(自説の提示 2 : 理証)

[O] yang 'di skad du phung po la sogs pa'i rang gi ngo bo med par ga (ga] DT; gang P) las shes par bya zhe na/

[A] 'dir smras pa/ phung po dang/ skye mched dang/ khams rnams (skye mched dang/ khams rnams] D; khams dang skye mched rnams P, skye mched dang/ khams T) ni rten cing 'brel par 'byung ba yin pa'i phyir rgyu med pa nyid dang/ rtag pa nyid kyi phyogs (phyogs] PT; sa phyogs D) bsal ba yin no//

【問い】さらに、“蘊などの自性は存在しない”とどのように知られるべきであるのか、というならば、

【答え】これに対して答える。蘊・界・処は縁起したもの (**pratītyasamutpanna*) であるから、無因であること〔という立場〕と、常なものであるという立場が否定されるのである。

rgyu las ^[P292b] byung ba'i phyogs la yang brtag (brtag] PT; rtag D) pa gnyis te/ dngos po skye ba na (i) rgyu dang dus mnyam pa nyid du skye 'am (skye 'am] DP; skye ba'am T)/ (ii) dus tha dad pa yin/

(i') de la phyogs dang po ltar na ni (a) rgyu dang 'bras bu snga phyi'i phyogs (phyogs] D; tshogs PT) thams cad dus gcig tu dmigs par 'gyur ba'i phyir dang/ (b) rgyu dang 'bras bu gnyis dbyer med pa dang/ (c) bskal pa yang skad cig (skad cig] T; lo gcig DP) tsam du 'gyur ba'i phyir ro//

(ii') phyogs gnyis pa la yang rgyu dang 'bras bu gnyis dus gcig tu tshogs pa med pa'i phyir nus pa med de/ de bas na rgyu med pa nyid du thal bar 'gyur ro// rgyu med na ni rtag tu yod pa'am med pa ^[D273a] nyid du thal bar (pa nyid du thal bar] DP; par T) 'gyur te/ ltos (ltos] D; bltos PT) par bya ba gzhan med pa'i phyir ro// ltos (ltos] DT; bltos P) na ni dngos po res 'ga' ba nyid du 'gyur ro//

gsum pa'i phyogs ni mi srid de/ dus gcig pa (pa] DT; φ P) dang dus tha dad pa gnyis

nature of [outer] object inasmuch as it (appearance) has the nature of consciousness (**vijñānātmakatvāt*). However (*ni*, **tu*), inasmuch as outer object surely exists (**asty eva*), matter (**rūpa*, form and color) is other than emptiness”, they are also refuted by ...

*: Appearance of blue and so on: Horiuchi 2018: 284 では Appearance, such as blue (青などという顕現) と Kdh. のように読んだ。ポイントは顕現にあるので致命的ではなからうが、青などは外界の実在であって経量部説からすれば認められるところであろうから、Tp. で訳す。Lopez 氏がすでに的確に訳していた箇所であり、不明を恥じる。

phan tshun spangs te gnas pa'i phyir ro//

〔一方、〕原因から生ずるという立場にも、二つの考察がある³⁸。事物が生ずるときには、(i) 原因と同時に生ずるか、あるいは、(ii) 異時〔に生ずるか〕である。そのなか、(i') 第一の立場（同時生起）のようであれば、(a) 原因と結果、すなわち、前と後の立場の一切が同時に認識されることになり³⁹、そして、(b) 原因と結果の二つが無区別であり、そして、(c) カルパ（劫）も〔一〕刹那（/一年）のみとなってしまう⁴⁰〔という不合理が生ずる〕ので、〔不合理である〕。

(ii') 第二の立場（異時生起）についても、原因と結果の二つが同一時に集まることはないので、〔原因に〕能力は存在しない⁴¹。それゆえ、無因であるということが帰結してしまう。無因ならば、常に存在するか〔常に〕存在しないかということが帰結してしまう。依拠すべき他のものが存在しないからである。依拠するならば⁴²、事物は一時的なものとなろう⁴³。

³⁸ この議論の流れは難解だが、ひとまず以下のように理解した。諸法は縁起したものであるから、無因と恒常が否定される。他方、有因という立場にも二通りの可能性があるが、そのいずれも成り立たない。ゆえに、生起というものは結局は世俗的なものに他ならない。

ここでは、後半部に関して、同じヴィマラミトラによる SPT とカマラシーラの BK, I（後出の注 40 を参照）に平行議論があることを新たに指摘しておきたい。

SPT, D ma 14a5-7, P ma 17b8-18a2:

[A] 'dir bshad pa

'bras bu skye na/ (i) rgyu dang dus mnyam par skye 'am (ii) dus tha dad pa yin/

(i') dus mnyam pa yin [yin] D; min P) na ni (a) kun cig car dmigs par ^[P18a] 'gyur ba dang (b) rgyu dang 'bras bu dbyer med pa dang/ (c) bskal ba yang skad cig gcig tu 'gyur ro//

(ii') dus tha dad na yang nus pa med pa'i phyir rgyu med pa nyid du 'gyur ro// rgyu med pa yin na ni (na ni) D; na P) ltos (ltos] D; bltos P) pa med pa'i phyir/ rtag tu yod pa 'am med par thal bar 'gyur ro// (de bas na don dam par skye ba zhes bya ba ni 'ga' yang yod pa (yod pa] D; yod P) ma yin no//

³⁹ Lopez, 57: cause and effect and all prior and subsequent points would be observed at one time

大八木：原因と結果は前後のすべての部分が所縁になるので (94)

代案：cause and effect, namely, all the previous and subsequent position would be observed at one time

Lopez 訳は後半は首肯できる。大八木訳は全体として理解しがたい。

⁴⁰ T 本には興味深い異説がある。それによれば、「カルパ（劫）も一年となってしまう」ではなく、「カルパ（劫）も〔一〕刹那 (kṣaṇa) のみとなってしまう」となる。そして、この前後の記述はカマラシーラの『修習次第』に類似する議論があるのだが (BK, I. 関連文献とともに、一郷 2001: 24ff. を参照)、そこでは、kalpasya kṣaṇamātratā-prasaṅgaḥ とある (BK, I.201.22-23)。また、上記の通り、SPT にも、(c) bskal ba yang skad cig gcig tu 'gyur ro// とある。好ましくない帰結 (prasaṅga) の指摘としてはこれが妥当であるので修正しておくが、DP に基づく読みも「/」の後に提示した。

⁴¹ Lopez, 57: According to the second position, since cause and effect would not come together at the same time, there would be no potency.

大八木：二つ目の方についても因果の二つは同時に〔存在する〕部分が無いので不可能である。

(94)

文意は単純で、「原因と結果が異時に存在するのであれば原因は結果に対して能力がないことになる。同時に存在してはじめて能力を発揮することができるから」ということ。Lopez 訳が妥当。

⁴² Lopez, 57: If there is no cause, there are the consequences that [things would] be permanent or would be nonexistent because there would be nothing else on which to depend [for production]. If they were

〔一方、〕第三の立場はありえない。同時と異時という二つ〔の立場〕は相互に排除しあって住しているから⁴⁴。

de bas na gzugs la sogs pa'i (pa'i] DP; pa T) snang ba gang yin pa de dag smig rgyu'i
chu la sogs pa bzhin du rang gi ngo bo stong pa yin no//

de dag la yang de dang de la brten nas 'byung ('byung] DP; byung T) ba zhes rtog pa
gang yin pa de ni kun rdzob yin no//

それゆえ、「色」などの顕現、それら「は」、陽炎（蜃気楼）などのように、「自性を欠いている」のである。

それらについても（関しても）、あれやこれやに依拠して生ずるという選択肢（理解）、それは、世俗である。

（自説の提示 3：教証⁴⁵）

de nyid kyi phyir bcom ldan 'das kyis 'phags pa rgya cher rol pa las/

shā (shā] DP; shag T) kya'i sras po (po] DP; pos T) rten cing 'brel pa'i ('brel pa'i]
D; 'brel par 'byung ba'i P(unmetr.), 'byung ba'i T) chos//

rang gi ngo bo med par mthong nas ni//

nam mkha' lta bu'i sems dang rab ldan pas (pas] DP; paT)//

g-yon can dpung bcas mthong bas g-yo ba med//

(śākyasutas tu svabhāvam abhāvaṃ dharma pratītyasamutthita buddhā |

gaganopamacittu suyukto na bhramate sabalaṃ śaḍha dṛṣṭvā || Lal,
21.24(308.13-14)⁴⁶ ||)

dependent,

大八木：無因ならば、常に有るかあるいは無いことになり、見るべき他者が無いからである。
〔もし〕見るならば (94)

Lopez 訳が妥当。ltos/bltos は「見る」ではなく、*apekṣ あたりの訳語で、依拠、観待する、の意。

⁴³ これは不合理な帰結ということではなく、一時的=無常ということで、正説として認められる立場。

⁴⁴ Lopez, 57: because [occurring] at the same time and at different times are mutually exclusive.

大八木：〔なぜならそれは〕同時と異時との二者の双方を離れてとどまるからである (95)

Lopez 訳が妥当。同時でなければ異時、異時でなければ同時という関係にあるから、ということ。梵本では *parasparaparihāreṇāvasthāna/-hāreṇa sthitā あたりか。

⁴⁵ Rim gyis でも、縁起して生じたものは世俗であるという文脈で、『楞伽経』と、以下の 4 つの同じテキストの引用がある (D ki 348b4-)。

⁴⁶ Lopez 氏は無言だが、大八木氏は漢訳での対応箇所を指摘する。しかし本箇所とは一致しない。他方、梵本は上記の通りであるが、現存する二つの漢訳 (T nos.186, 187) に対応は見いだせなかった（「降魔品」）。なお、韻律は āryā の Gīti であろうから、韻律に合わせれば、異読は報告されていないものの (Lefmann, II.153)、abhāvaṃ>abhāva, -samutthita>-samutthitaṃ とすべきか。

ces 'byung ba dang/

まさにそれゆえ、世尊によって、『ラリタヴィスタラ』で、

「釈迦族の子（釈尊）は、縁起した法は自性が存在しないと見て、
虚空のような心を具え、軍勢と共なる騙し手（＝悪魔）⁴⁷を見て〔も〕、動揺し
ない」

と〔説かれて〕おり、

dkon ^[T15] **mchog ta la la las kyang/**

rkyen las skyes pa rang gi dngos ma skyes//

chos kyi lus ni rgyal ba rnams kyi sku//

chos nyid rtag tu gnas pa nam mkha' bzhin//

bstan na chos rnams sbyong ba thob par 'gyur//

(Śikṣ, 342, 9-10:

pratyaajāta ajātasvabhāvā dharmāśarīra ajātaśarīrāḥ |

dharmata nityasthitā gaganasthā sūcata dharmaviśodhani labdhā ||

Tibetan translation of Śikṣ, D no.3940, khi 182b1-2:

rkyen las byung ba ma skyes ngo bo nyid//

rgyal ba rnams kyi sku ni chos sku ste//

chos nyid nam mkha' bzhin du gnas so zhes//

brjod pas chos rnam sbyong ba thob par 'gyur//

『大乘集菩薩学論』卷 24 (T no.1636, 32.140b17-18) :

自性無生從縁起 法性常住等虚空

了知佛身即法身 是故得成此光明)

zhes gsungs so//

『宝光明 (Ratnolkā⁴⁸)』にも、

「“縁（間接原因）から生じた諸のものは、自性が不生なものである⁴⁹。

法身は勝者たちの身体である⁵⁰。

また、同じ経文は Rim gyis にも引かれる (D ki 348b4-5)。

⁴⁷ Lopez, 57: demons and their hosts

大八木：力ある悪人 (95)

代案：deceitful one (i.e., devil) accompanied by a force

cf. BHSD, s.v., śaḍha.

⁴⁸ Lopez氏は無言だが大八木氏が漢訳対応箇所を指示する。この偈はŚikṣに引用されるが、談等はその漢訳のロケーションを指示する。他方、梵本は上記の通り。

⁴⁹ ajātasvabhāvā: Bv.内容的には、YṢ, 12ab の svabhāvena/-tas notpannam と同断であろう。

⁵⁰ pāda b は Śikṣ の漢訳・蔵訳、PHT、Rim gyis が一致し、Śikṣ の梵本のみが異なっている。

法性は、常に住しており、虚空〔のごとく〕住している”と、
説示することによって、法の浄化が得られる」
と説かれている。

sangs rgyas thams cad kyi yul la 'jug pa ye shes snang ba'i rgyan las kyang/ ^[P293a]

chos kyi rang bzhin las g-yo ba med do// chos kyi rang bzhin las ma g-yos pa ni chos
kyi rang bzhin thob par 'gyur ro//

chos kyi rang bzhin thob pa ni cung zad kyang spros par mi byed do//

de ci'i phyir zhe na/ rgyu dang rkyen gyis bskyed pa'i phyir ro// gang rgyu dang rkyen
gyis bskyed pa de ni shin tu ma skyes pa'o//

gang shin tu ma skyes pa de ni nges pa (pa] T: par DP) thob pa yin no// gang nges pa
(pa] T: par DP) thob pa de ni chos thams cad yid la byed pa dang lhan cig gnas (gnas]
DP; gnas par T) byed pa ma yin no

(dharmaprakṛter na calati/ dharmaprakṛter acalam dharmaprakṛtiprāpto bhavati/

dharmaprakṛtiprāpto na kimcit prapañcayati/

tat kasya hetoḥ/ pratyayahetujanitatvāt// yaḥ pratyayahetujaniṭaḥ so 'tyantājātaḥ/

yaś cātyantājātaḥ ^[49] sa niyāmaprāptaḥ/ yaś ca niyāmaprāptaḥ sa

sarvadharmamanasikāraiḥ sārddham na samvasati/ JĀA 1, 48-49, JĀA 2, 82-85

『仏説大乘入諸仏境界智光明莊嚴經』(T no.359, 12.258c21-26) :法自性無動。若法自性無動即法自性乃有所得。若法自性有所得者。即無有少法而可決択。

何以故。当知因縁所生性故。若因縁生性即畢竟無生。若畢竟無生即得寂靜。若得寂靜即一切法作意悉同無依。)

zhes 'byung ba la sogs pa gsungs pa yin no (pa yin no] DP; so T)]//

『一切の仏の境界に入る智の光明の莊嚴（智光明莊嚴）〔經〕^{51]}』にも、

「〔法性に矛盾しない者は、一切のところに随順する。一切のところに随順する者は（dharmatām avirodhayan sarvatrānulomo bhavati/ sarvatrānulomo)〕法の本来性（prakṛti、本来のあり方）から動かない。法の本来性から動かない者は、法の本来性を得る。

法の本来性を得た者は、いかなるものも戯論（言語による多様化）しない。

それはなぜかといえば、因と縁から生み出された者（人）^{52]}であるから。因と

⁵¹ Lopez氏は無言だが大八木氏が漢訳対応箇所を指示する。梵本に加え、大八木氏と同様に、三本ある漢訳のうち法護訳を挙げておいた。関連資料はJĀA 2同箇所を参照。

⁵² この前後はすべて「人」を指すものとみておいたが、ここと続く2項目は「もの」を指すとい

縁によって生み出された者、彼は、完全に不生な者である⁵³。

そして、完全に不生な者、彼は確定を得ている。そして、確定を得た者、彼は、一切法を作意することと共に住しない⁵⁴」

云々と説かれている。

de nyid kyi phyir 'phags pa klu sgrub kyi zhal (zhal] DP; zha T) snga nas kyang (kyang] DP; φ T)/

rten cing 'brel par gang 'byung ba//

rang bzhin gyis ni de ma skyes//

rang bzhin gyis ni gang ma skyes//

de la skye zhes ji skad bya//

(yat praṭīyasamutpannam notpannam tat svabhāvataḥ/

svabhāvena yan notpannam utpannam nāma tat katham//YŚ, 19⁵⁵

『六十頌如理論』(T no.1575, 30.255a3-4) :

若已生未生 彼自性無生

若自性無生 生名云何得)

shin tu phra ba'i dngos la yang//

gang gis skye bar rnam brtags pa//

rnam par mi mkhas de yis ni//

rkyen las byung ba'i don ma mthong// (YŚ, 12 (Lindtner, 106)

う可能性もあろうか。高崎直道氏は本經のチベット語からの翻訳に際してこの箇所（高崎 1975: 320）では「[すべてのものは]」と補っており、2項目後には、「そのような人は（さとりの）決定を得る」と訳している。

⁵³ Rim gyis で引用されるのは、この段落と前の段落のみである。

⁵⁴ Lopez, 58: That which is definitely attained, does not abide with mental activity on any phenomenon.

大八木：決定を得たもの、それはすべての現象を心になして、[しかも]共に住することなきものである（95）

文意は、ひとことでは、一切法を作意しない、ということ。先行訳のうち、まず Lopez 訳についていえば、that which は人を指すのではないであろうからその点で不適切。また、nges par は「確実に」、という副詞ではなく、Acc.であり、「確定を」、の意である点でも、不適切。その際、チベット語としては par のままでも後者の読みを得ることは可能であるが JĀA のチベット語訳には nges pa thob pa とあり (JĀA 2, 84)、本 PHT においても T 本はその読みである。ゆえに、本校訂テキストでは T 本の読みを採用した。他方、大八木訳はこの語については妥当な理解を示しているが、全体としては理解しがたい。

代案：And he who has obtained certainty does not live with the attention to all dharmas (i.e., does not pay attention to/think of all dharmas).

⁵⁵ Lindtner, 108, Advayavajrasaṃgraha, 185. この pāda a について、Lindtner の回収した YŚ の梵本では tat tat prāpya yad utpannam とあり、それは同チベット語訳の de dang de brten と対応するが、本 PHT での引用とは一致しない。後者には *yat praṭīyasamutpannam が想定される。他方、Advayavajrasaṃgraha (Pañcatathāgatamudrāvivarāṇa) での引用は PHT と一致する。

ibid., 254c18-19:

縁生性可見 是義非無見
此中微妙性 非縁生分別)

zhes gsungs so//

まさにそれゆえ、聖者ナーガールジュナ（龍樹）様⁵⁶も、

「依存して生じたもの、それは、自性としては不生である。

自性として不生であるもの、それがどうして“生じたもの”であろうか。」

「極めて微細な事物に対しても、生起を構想する者⁵⁷、

かの無知な者によっては、縁生の意味は見られない」

と説いた。

略号・文献（前稿も参照）

Advayavajrasaṃgraha: 密教聖典研究会「アドヴァヤヴァジュラ著作集（1）」『大正大学総合仏教研究所年報』10, 178-234, 1988.

JĀA: Sarvabuddhaviṣayāvatārajñānālokālaṃkāra nāma mahāyānasūtra (『仏説大乘入諸仏境界智光明莊嚴經』) (JĀA 1: 「梵文校訂『智光明莊嚴經』」『空海の思想と文化 小野塚幾澄博士古稀記念論文集 下』東京：ノンブル社，2004, (1)-(90). ; JĀA 2: 『梵藏漢対照智光明莊嚴經』東京：大正大学総合佛経研究所梵語仏典研究会，2004.)

Lopez: *Elaborations on Emptiness: Uses of the Heart Sutra*, Donald. S. Lopez, Jr., Princeton: Princeton University Press, 1996.

Lyne, Bansat-Boudon. “The World on Show, or Sensibility in Disguise. Philosophical and Aesthetic Issues in a Stanza by Abhinavagupta (Tantrāloka I 332, Locana ad Dhvanyāloka I 13)”, in Eli Franco, Isabelle Ratié. *Around Abhinavagupta. Aspects of the Intellectual History of Kashmir from the Ninth to the Eleventh Century*, 2013, Leipzig, Germany.; LIT Verlag, Berlin, 2016, *Around Abhinavagupta. Aspects of the Intellectual History of Kashmir from the Ninth to the Eleventh Century*.

Müller, Max. “The Ancient Palm Leaves containing the Pragñā-Pāramitā-Hridaya-Sūtra and The Uṣṇīṣa-Vigaya-Dhāraṇī” in *Buddhist Texts from Japan (Vol 1.iii)*. Oxford

⁵⁶ 大八木氏が、以下の2偈が『六十頌如理論』チベット語訳19, 12偈からの引用であると指摘し、漢訳を提示している。なお、後者は梵本が回収されていない箇所である。漢訳も挙げたが、文言は必ずしも一致しない（羽溪了諦訳、『国訳一切経 中観部三』大東出版社, (34), (35)）。

⁵⁷ 大八木：何かによって生ずると考えるもの（95）

「何かによって」は gang gis の訳であろうが、首肯できない。gang gis ... de yis の対応。

- University Press, 1881.
- PHT (『広大注』) : Vimalamitra (tr. Vimalamitra, Nam mkha', Ye shes snying po), 'phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i snying po'i rgya cher bshad pa (Āryaprajñāpāramitāhṛdayaṭīkā), D no.3818, P no.5217.
- Śikṣ: Śikṣāsamuccaya (『大乘集菩薩学論』) . C. Bendall ed. [repr. Tokyo: Meicho Fukyūkai, 1977, orig. pub. 1897-1902].
- Silk 1994: Jonathan A. Silk, *The Heart Sūtra in Tibetan: a critical edition of two recensions contained in the Kanjur*. (Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, Ht. 34.), Wien: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien, 1994.
- SNS (『解深密經』) : *Samdhinirmocanasūtra*. É Lamotte ed., Paris: Adrien Maisonneuve, 1935.
- YŚ: Yuktiṣaṭīkā (『六十頌如理論』) . see Lindtner 1982: Chr. Lindtner, *Nagarjuniana. Studies in the Writings and Philosophy of Nāgārjuna*. Akademisk Forlag: Copenhagen, 1982.
- 一郷正道 2011 : 『瑜伽行中觀派の修道論の解明—『修習次第』の研究—』科学研究費補助金（基盤研究 C）研究成果報告書。
- 大八木 : 大八木隆祥「ヴィマラミトラ 般若心経広大註」『集成』 69-122.
- 『五位七十五法』: 斎藤明 他『『俱舍論』を中心とした五位七十五法の定義的用例集—仏教用語の用例集（バウツダコーシャ）および現代基準訳語集 1—』インド学仏教学叢書 14, 東京 : 山喜房佛書林, 2011. (Akira Saito (in chief), Daigo Isshiki, Koichi Takahashi, Toshio Horiuchi, Hisataka Ishida, Kuninori Matsuda and Shiori Ijuin, *The Seventy-five Elements (dharma) of Sarvāstivāda in the Abhidharmakośabhāṣya and Related Works. Baudhakośa: A Treasury of Buddhist Terms and Illustrative Sentences*. Volume VI, STUDIA PHILOLOGICA BUDDHICA: Monograph Series, Tokyo: International College for Postgraduate Buddhist Studies (2018)).
- 『集成』: 『般若心経註釈集成<インド・チベット編>』渡辺章悟・高橋尚夫編, 東京 : 起心書房, 2016。
- 高崎直道 1975: 『大乘仏典 12 如来蔵系経典』東京 : 中央公論。
- 談等 2010 : 谈锡永等著譯『心经内义与究竟义』北京 : 华夏出版社 (pp.52-84: 「圣般若波罗蜜多心经广释」无垢友尊者造 谈锡永 刘卓衡译)
- 堀内俊郎 (Horiuchi, Toshio) 2018: “Dialog between Madhyamaka, Vaibhāṣika, Sautrāntika, and Yogācāra: From Vimalamitra’s commentary on the *Heart Sutra*”, *The*

2nd International Conference of the Chinese Association of Vijñaptimātratā Studies (『東方唯識学会第二届国际研讨会論集』, 271-290 (unpublished 予稿集)).

do. 2019a: 「インドにおける『般若心経』注釈文献の研究—ヴィマラミトラ注 (1)—」『東洋学研究』56 (印刷中)

do. 2019b: 「インドにおける『般若心経』注釈文献の研究—ヴィマラミトラ注 (2)—」『国際哲学研究』8 (印刷中)

渡辺章悟 2009: 『般若心経—テキスト・思想・文化』東京：大法輪閣。